

「観点別学習状況の評価」に関するアンケート 調査結果概要

河合塾では、2023年5～6月、標記のWEBアンケートを実施しました。ご多忙の折、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

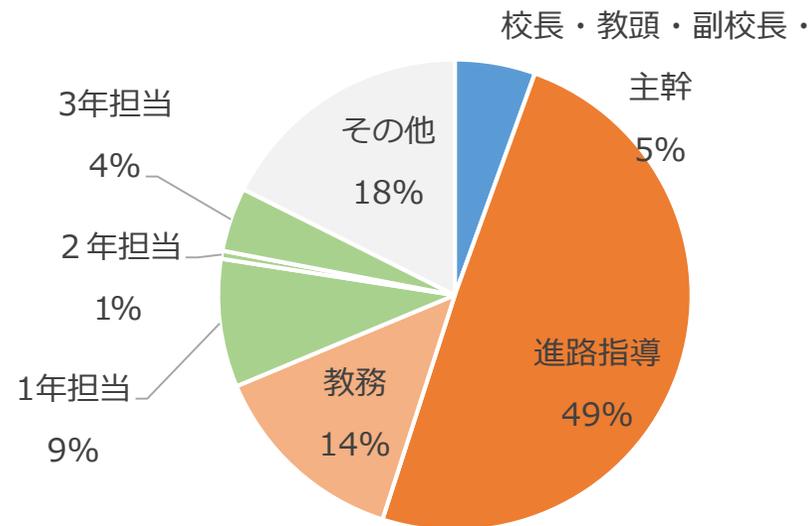
河合塾

対象 高校・中等教育学校の教員対象
回答数 182件
実施方法 WEBアンケート
実施期間 2023年5月22日～6月8日

設問

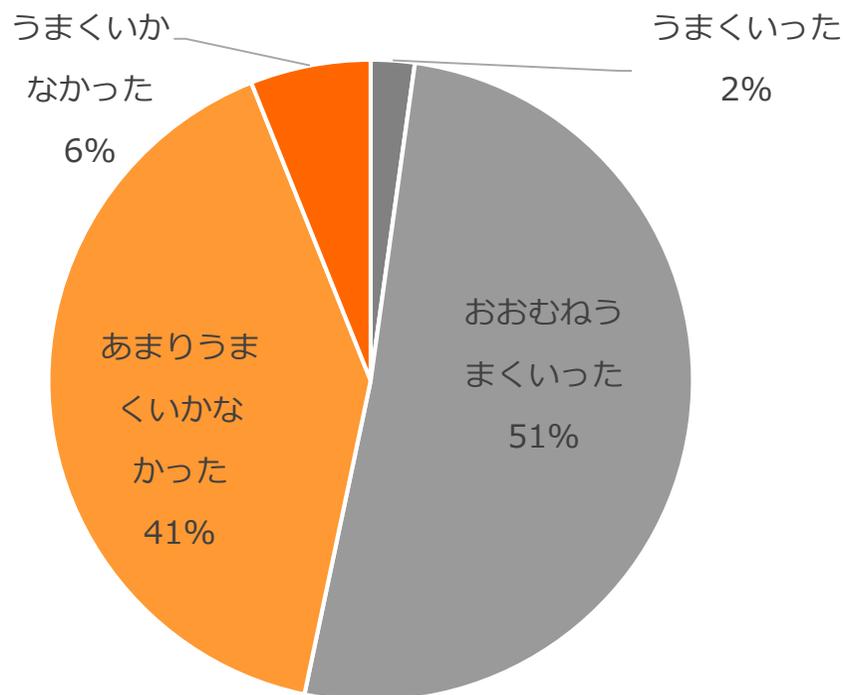
1. 2022年度に実施した観点別評価について、どのようにお感じですか？
2. 観点別評価について、課題をお感じですか？
3. 上記を選んだ理由を具体的にお書きください。
4. 観点別評価に関して、取り組んでいることを教えてください。学校としての取り組みでも、先生ご自身の取り組みでも構いません。
5. 現在ご担当の校務分掌を選択してください。
6. 主にご担当されている教科を1つ選択してください。

回答者の校務分掌 (n=182)

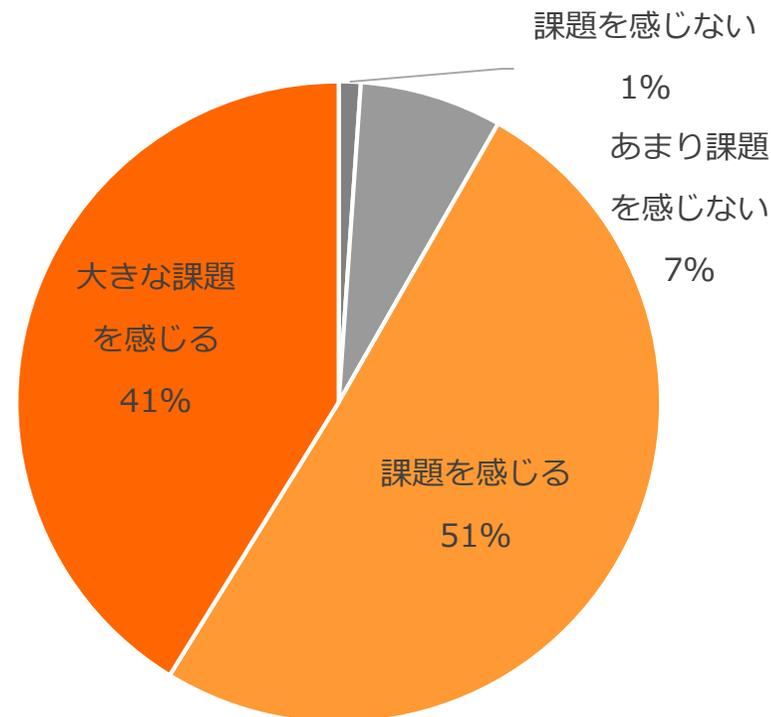


2022年度の観点別評価は「うまくいった」「いかなかった」が拮抗
9割以上が課題を実感

2022年度の観点別評価 (n=182)



観点別評価の課題 (n=182)



※河合塾「観点別学習状況の評価に関するアンケート」より。
高校・中等教育学校教員を対象に、2023年5～6月にWEB上で実施。
回答件数182件

これまでの評価からの切替

- ほぼ定期考査のみでの評価だった制度から日常の授業に対する取り組みを大きく評価する制度に抜本的に変更したため、現場での混乱があった。
- 職員の理解が進み、適切な評価ができたがやや評定が高めになっていたので、修正も必要と感じた。
- 旧来の評価と評価基準が異なるので、「従来なら5なのに、観点別では3がつく」「従来なら4にしかならないのに、観点別では5になる」ということが起こりえることに教員が早く慣れる必要がある。
- 観点3（主体的に学習に取り組む態度）が教科によって基準がまちまちであった。観点1 2（知識・技能、思考・判断・表現）は主に定期考査を基にしたが最初に設定した基準がきつく評定5がほとんどいない状態になってしまった。
- 担当学年からはABC評価から評定に変換すると本校では4が少なく、5と3が多くなる変な分布となったようで、この評価で良いのかという疑問のまま1年を終えてしまった
- 観点別の生徒に知らせる区切りがABCの3段階でCはほとんど付かないので、AかBの区切りのみとなる生徒が多くなり、自分の頑張りの評価の変化を感じづらい。
- 観点別評価への賛否はともかく、導入されたからには趣旨に沿って授業改善に結びつく評価を積極的に行うべきだが、一部の教員は旧来の評価観から抜け出すことができていない。

客観的な評価の難しさ

- 知識と思考力にそれぞれカテゴリーされる生徒の行動とそれに対する評価方法について、明確なガイドラインや例がない
- 「主体的に学習の取組む態度」の評価が主観的になりやすい。しかも3観点は基本同一割合（35:35:30）なので、非常に大きなウェイトを占める
- 主体性の評価が難しい。教員間で格差が生じやすい。客観性を保とうとすると形式的な評価になりがちである。また、テスト作問上の工夫も大きな労力を要する。
- 知識技能、思考判断表現の2観点の評価はおおむねよいが、主体性協働性の部分の評価の妥当性が課題。

評価基準の統一の難しさ

- 評価基準を全教科で統一、合わせていく事が難しい。
- 評価に主観が入ってしまう。先生によっても基準がずれる。
- 仮にループリックを作成しても、厳密には同じにならない。動画でパフォーマンステストをとって複数でみるとなるとそれなりの時間が必要となる。3 5人サイズの生徒なら、内容にもよるが、3時間程度は必要。
- 主体的に学習に取り組む態度の評価基準がうまく定まらず、正しく評価できているかは疑問である。しばらくは手探りでやるしかない。

適切な評価材料の収集の難しさ

- 主体性評価の材料がうまく集められなかった。
- 知識・理解，思考力・表現力・判断力，主体性のABCの付け方，材料の選択に一部（特に主体性）苦慮した。
- 単元テストが増えたおかげで授業時間が不足する。

趣旨に沿った運用の難しさ

- 年度の最後に評価に合わせて主観的につけたもの（評定5であればAAA）であったり、主体的に学習に取り組む態度では、提出物が出ていればAのように、導入目的を全く果たしていないから。
- 観点別評価と、学期末に行う総括的評価の整合性がうまく取れていない気がするから。本来であれば形成的評価に活用すべきところだとは思いますが、本校では学期末にしか観点別評価を行っていないため、この評価を受けて学習改善を図る、という本来の目的を果たしていない。
- 手間のわりに生徒に還元できていない。観点別によって、生徒の力が格段に伸びたというエヴィデンスが本当にあるのか疑問を感じる。
- 授業を変えることへの教員からの理解が得られない、形成的評価をうまく活用できていない
- 生徒の次の学習につながるための前向き志向の活用が出来ていない。

評価の煩雑さ・時間不足

- 生徒一人一人に対して3観点の評価を行うためには時間もスキルも足りない。結果的に、ペーパーテスト以外では、ノートやレポート、リフレクションシートの提出の有無や記述量など、見てすぐにわかるようなものの評価にならざるを得ない。また、3観点であるため、定期テストで80点あっても評定が3ということもある。
- 多角的に評価するので、テストの点数のようなはっきりとした差がつかなくなった。しかし、このことには長所も短所もある。特に短所においては、今後推薦等の校内選考で苦慮することになるので対応を考えていかなければいけない。また、評価を出すのに手間がかかるようになった。
- 評価が煩雑になり先生方が成績を出す時間が以前よりかかっているように感じた。働き方改革という観点からみると逆行している気がする。やはり主体性を評価するのが難しいように思う。評定が進路（入試）にかかわるので評価に入れることに対して抵抗を感じる先生が多い。そのため、どうしても無難なつけ方になって、本来の目的からずれてしまっているように感じる。

指導と評価の計画

- 育成したい生徒像を目指しながら、授業内容を単元ごとや教材に反映していくようにしている。
- 章のまとめりごとの評価と毎時間の活動をリンクさせておくとも評価も説明もしやすい
- 職員間で情報共有を図りつつ、各教科においてはシラバスとの整合性をとる。各教科の単元ごとに評価項目やバランスを精査する必要がある。

多様な場面の設定

- 定期考査の工夫、およびレポート等の記述課題を出題、ICTを活用した評価方法の模索
- プリントの提出機会を増やした
- 授業ノートやレポートの細目な確認と観点別評価についての生徒への具体的な説明。
- 学校として観点を付けるのは年度末のみであるため、観点別にペーパーテストを作成し、毎回のテスト後にフィードバックをしている。毎授業事にリフレクションを設定しポートフォリオ化している。
- 毎回の授業で、何ができるようになるかを明確に示して授業すること、AIドリルを活用して毎時間の学習内容を小刻みに確認テストとして実施すること、家庭学習の状況をノートアプリを活用して確認・アドバイスをすることなどを実施している。
- デジタル教材とツールを用いて日頃から「主体的に学ぶ態度」をきめ細やかに採点しています。

※河合塾「観点別学習状況の評価に関するアンケート」（2023年5～6月）より。一部抜粋。

定期考査の問題を観点別に出題

- 考査、定期テストの設問を、知識・技能、思考・判断・表現、どちらの問題か意識している。
- テストの内容を、知識・技能と思考・判断・表現に分け、それぞれを評価の基本とした。
- 今年度、考査問題をすべて観点別に作成した。
- 課題や試験の設問ごとに観点別に分類し、生徒へどれが何の力を問うているかを理解しやすくなるように工夫して提示している。
- 課題点、態度点、考査点の評価から、考査に関してより細分化して（知識技能・思考判断表現）の評価を行うようにしました。
- 考査や小テストにおける各設問での出題意図の明示。

振り返りの機会の設定

- 提出物や実習の感想文など振り返りをさせた。
- 毎回授業の最後に振り返りをさせている。
- 学びの修正を促すための振り返りをよく行うようになった
- 振り返りの機会を適切に設け、学習改善に資する評価となるよう意識している。また、その振り返りの内容についても継続して試行している。

パフォーマンス課題の実施

- パフォーマンス課題。授業内の振り返りなど。
- 「世界史探究」で毎時間、「問い」づくりを行っている。この「問い」の内容・レベルをルーブリック評価することで客観性を担保できた
- 学期に一回、知識を得た内容の実験を自分で考えてやらせようと考えている。
- 1年次数学において、生徒に自主的な取り組みをさせている。1年次英語科でアプリを用いた学習に取り組んでいる。
- テストの問題に、学習したことを使って解く問題、意見を表明する記述などを盛り込んでいる。レポートを作成することを課している
- 課題提出やレポート等はすべて主体的に取り組む態度に組み入れ、生徒の書いた跡で評価する。その分、他の二観点に考查成績を最大限加味し、考查の重要性を担保する。

評価のすり合わせ

- 評価基準に関して、担当教員どうしの意見のすり合わせ。
- 教務部を中心に各教科で評価のすりあわせをしている。
- 教務課が観点別評価の叩き台（指標）を出し、それに従って評価している。

評価の省力化

- 評価対象物の簡素化
- ルーブリックを作成し、先生方に活用してもらっている。
- 全教科でAとCを細分化してA○, A, C, C×とし、一旦5段階で評価するようにした。
- 評価点の入力からABCや評定を出せるエクセルの準備
- 評価を行う提出物をすべてデジタルデータにしてから、評価がずっと楽になりました。
- 電子データにして評価している。

生徒や保護者への情報共有

- 評価の基準（ルーブリック）をあらかじめ生徒や保護者に示すことで、取り組みに対する目標をはっきりさせる。
- 事前に評価対象とする課題とその課題で評価する観点を生徒と共有した。各観点を評価する評価の場面をできる限り多様にたくさん設定した。
- 小テストを節目で行う、どのような行動がプラスになるか生徒に事前に通知する
- 観点別のプリント作成・観点別テスト作成・シラバスにて通知

河合塾 進学情報誌「Guideline 7・8月号」のご案内

観点別評価の振り返りをテーマに、学校の実践事例などを紹介

URL <https://www.keinet.ne.jp/teacher/media/guideline/>

河合塾「Kei-Net Plus 教育関係者のための情報サイト」のご案内

最新の教育情報、独自のインタビュー記事、イベントの案内を随時配信中

URL <https://www.keinet.ne.jp/teacher/>

- ◆ 本資料の内容の無断転載・複製を禁止します。
- ◆ 本資料に関するお問い合わせやご意見は、こちらまでお寄せください。

学校法人河合塾 教育研究開発部

Email keinet-plus@kawai-juku.ac.jp